



選手権での勝利を目指し、寸暇を惜しんで練習に励む



平成25年11月9日、全国高校サッカー選手権愛知県予選決勝を制した喜びの笑顔

巻頭特集 東海学園高等学校サッカー部

# 全国高校サッカー 勝利をめざして

平成25年11月9日、名古屋市港サッカー場は歓喜の渦に包まれた。  
\*全国高等学校サッカー選手権愛知県予選の決勝において、  
東海学園高等学校が宿敵中京大附属中京高等学校を2-0で完封し、  
5年ぶり3回目の選手権出場を手にした瞬間だ。  
創部からわずか13年。決して恵まれた環境でない中、  
全国での勝利をかけて、自分たちのサッカーを追求している。

※男子高校生のサッカーにおける全国大会は、全国高等学校総合体育大会サッカー競技大会と全国高等学校サッカー選手権大会の2つ。それぞれ「夏のインターハイ」「冬の国立」と、サッカー少年権の存在

## 創部からわずか4年目で 冬の国立に立った東海学園

東海学園高等学校の前身は東海女子高等学校で、平成12年に共学化した。翌年サッカー部発足が決定し、平成13年4月に創部へと至った。当初より部を率いるのは鶴田道弘監督。愛知県出身、名古屋グランパスやヴィッセル神戸などでプロサッカー選手として活躍した経歴を持つ。「共学になったばかりで実績のない初年度は、部員は16人、その半分以上が未経験者でした」というスタートを振り返る。

グラウンドがないため空地を利用して練習し、初めての公式試合

や前々年のほうが高かったんです」と監督は話す。「それが高校サッカーのおもしろいところですよ」と続けた。技術は未熟でも、とにかくサッカーが好きという気持ちや、がむしゃらに取り組む姿勢が勝利に導いたり、観戦する人の心を打つたりする。それが高校サッカーだ。「とにかく、サッカーを追求し続け、考え続けることが、進歩と成長につながると思っています」人間形成に重きを置く監督は、「自分で考えるサッカー」を指導する。「『自分で考える』としか言わないので、入部したての1年生は、『サッカーを教えてもらえない』と嘆きます」と笑う。与えられた指示通りに動くことに慣れていない現代の若者は、自身の力で方法論を導き出すことにつまずく。しかし1年後には、

稲留 楓 選手  
副キャプテン・ミッドフィールダー  
3年生  
全国を目指したくて入学しました。1年生のうちから試合に出してもらい、良い経験を積むことができました。最後の選手権では、監督に、ぜひとも全国大会1勝をプレゼントしたい。そして優勝を目指します!

小室 貴大 選手  
キャプテン・センターバック  
3年生  
高いレベルでサッカーをしたかったと思って入学しました。一般入試でしたが、自分を認め、成長させてくれた監督に感謝しています。憧れの舞台では、一つでも多く試合ができるように一戦一戦頑張ります。

下田 拓夢 選手  
副キャプテン・ボランチ  
3年生  
テレビで高校サッカー愛知県予選決勝の東海学園を見て、入学しました。プレーヤーとしても人間としても成長できたのは監督のおかげ。選手権では、心からサッカーを楽しみ、全力でプレーしたいと思っています。



「選手権ではベスト4を目指します」と鶴田道弘監督

## 全国高等学校サッカー選手権大会

第92回全国高等学校サッカー選手権大会  
東海学園高校の初戦は12月31日(火)  
埼玉スタジアム2002にて、  
12:05キックオフ!

文/植松由紀子 写真/東海学園高等学校提供・D-studio デザイン/久富優佳

自分の力でミスの発見や上達のコツをつかむようになるそうだ。「考える力がつけば、自然と技術も上がるといことです」そんな監督が何よりも大切にしているのが、「目配り気配り心配り」の意識。試合中、ボールを持った仲間をなんとか助けたいという気持ちや、フラインプレーにつながる可能性がある。チームのために自分のできる精いっぱい働きをしたいという思いが、得点につながることもある。「自己満足のプレーからは、目先の達成感しか得られません。チームのために、仲間のためにという、人間として基本的なことを大事にしてほしいと思っています」と、やわらかな眼差しで選手を見やる。「サッカーをすること自体より、東海学園サッカー部でこの仲間たちと全力で取り組んできたとい

は0-16の大差で敗退。「まずは部員を鍛えようと、かなり厳しい練習をさせたので、どんどんやめて残ったのは4人でした」と鶴田監督。その年のインターハイ予選はやむなく辞退し、部員の確保に奔走した。「近隣の中学生の中で、強豪校からスカウトされなかった生徒を中心に声をかけ、なんと20人集まりました」新チームに対して監督は、基礎練習を徹底して守備力を強化した。加えて2年生が4人しかいなかったため、1年生は初めから試合に出て経験値を上げることができた。結果、その学年が3年生になった平成16年秋、全国高校サッカー選手権愛知県予選で見事優

勝。創部4年目にして初の全国大会出場が叶ったのである。しかし、「初めての選手権は初戦敗退で、試合内容も満足のいくものではありませんでした」と監督。部としての歴史や経験の浅さが、大舞台で弱みとなった。以後、プレッシャーや相手の気迫に負けない気持ちを育てるため、選手に声をかけるようになったという。「どんな強豪校も、伝統校も、所詮は同じ高校生、全力でサッカーをすることは同じだぞ」と。全国大会出場を果たしたことで、東海学園高校サッカー部の名は一気に知れ渡る。次の年から入部希望者は格段に増え、ライバル選手の多い伝統校でなく、活躍のチャンスが見込める東海学園を選ぶ選手も出てきた。「部員数が130を超え、選手の層は厚くなりましたが、グラウンドが整っていないので、今度は練習方法に工夫が必要となりました」と苦笑いする。チームを1-4軍に分け、筋トレと試合形式の練習を交代でするなど、全員が均等に練習できる環境づくりに配慮している。

## サッカーをとことん追求 進化と成長を続ける

初出場から4年後の平成20年、東海学園サッカー部は再び選手権出場の切符を手に入れた。「不思議なもので、チームとしての完成度や個々の選手の実力はその前年うことが、将来生きてくるといと思っています」平成20年以来、選手権出場のない東海学園サッカー部。その間、ライバルである中京大京高校が3回出場し、うち2回は愛知県予選の決勝で敗れている。「ライバル意識はありますが、そこを倒すことだけを目標にできたわけではありません。能力や選手の層は、やはり伝統校である中京大京が勝っていると思います。決勝で勝つのは、選手たちが純粹にサッカーを追求した結果だと思えますから、嬉しかったですね」と監督。今、勝利の喜びと、周囲の期待を背負う心地よい緊張感が、選手たちを上昇気流に乗せているという。この波に乗って、まずは全国大会での初勝利を目指して、東海学園らしいサッカーを展開してくれることを願う。

